

# 『陔餘叢考』訓譯卷十一之五

中 林 史 朗  
大 兼 健 寬  
田 中 良 明

昨今である。

因って、更なる新たな参加者を求むる事、誠に旱天の慈雨を求めるが如き切なるものがあり、この讀書會が中斷の危機に瀕している、と言うのが偽らざる状況である。

この卷十一の五を擔當された諸士は、大兼健寬（現、大学院博士後期課程生）・田中良明（現、東洋研究所専任講師）の二人（五十音順）である。

平成二十五年季秋

識於黃虎洞

今回は諸般の事情で、前回の残り（卷十一卷七篇中の一篇、五）を登載させて頂く。この間、この作業に着手して略十数年以上の歳月が流れ、現在は卷十七を讀解中であるが、参加者（漢文訓讀に興味があり、難解な文章の讀解に意欲の有る學生）の減少は、高校での漢文授業時間の衰退とも關係するであろうが、世の流れとは雖も、實に如何ともし難いものがある。

現在の参加者は、現職講師一人とオーバードクター一人を中心に、大学院修士課程一人・學部三年生一人と言う、僅か四人のメンバーで毎週細々と讀み進めている状況で、「如何ぞ此に對して涙垂れざらん」と言う思いが錯綜する

## 【原文】

5 新唐書多周旋

新唐書著其人之美於本傳而別見其疵於他傳固不失隱揚之意其有數人共一善事而分隸數人使各得專其功若不數傳參觀則竟似一人獨爲之事而與他人無與者此雖善善欲長究非信史也吳績糾繆已摘數條如頡利之被擒也李靖傳則以爲張寶相所擒江夏王道宗傳則以爲道宗所執一張昕之死也高固傳則以爲固伺聞斬之楊朝晟傳則以爲朝晟父海實所斬一劉闢之叛也杜黃裳傳則云惟黃裳固勸不赦嚴綬傳又云綬以天子新即位不可失

威請必誅李吉甫傳又謂吉甫獨請無赦續所糾擿已略見一端矣然不特此也蘇頌傳元宗平內難書詔填委獨頌在太極殿後閣口所占授功狀百緒輕重無所差書史曰丐公徐之不然手腕脫矣是元宗誅章后時惟頌一人執筆也而劉幽求傳又云是夜號令詔敕一出幽求手李又傳又云韋氏之變詔令嚴促多又草定則一事也而係之三人究未知何者爲是耶按舊唐書幽求傳元宗討韋庶人是夜所下制書皆出幽求而頌傳竝無誅韋時執筆之事但云神龍中文誥皆出其手而已然則頌草制敏速本擅名一時而誅韋之夕實未嘗直子京強以此事隸之耳又通鑑穆宗得風疾裴度力請入見并上疏請立太子李逢吉進言曰景王已長請立爲太子度請速下詔兩省官亦繼有疏於是敬宗得立是敬宗之立度與逢吉及兩省官共成之也亦見敬宗本紀而裴度傳則云穆宗風眩度獨到內殿求立太子遂以景王爲嗣則全以此事歸功於度矣李逢吉傳又獨以此事歸於逢吉而略不及度則立敬宗究誰之力耶朱泚之亂德宗欲幸鳳翔而中止蕭復傳則云復謂上曰鳳翔乃泚舊部曲恐有同惡者遂不往未幾其將李楚琳果亂而姜公輔傳又謂帝欲赴鳳翔公輔謂鳳帥張鎰乃文吏軍且有變乃之奉天則德宗之舍鳳翔究何人勸止耶敬宗之崩也爲蘇佐明所弒劉克明矯詔立絳王悟樞密使王守澄楊承和等迎立江王涵并討克明等斬之以裴度攝冢宰百官謁見江王於紫宸門外廡是文宗之立全屬守澄等功

度初不與知新書於文宗紀敘之略不及度而度本傳則云敬宗被弒度定策誅劉克明等迎立江王是爲文宗又略不及守澄等則并與本紀自相抵牾矣蓋歐公作紀據事直書子京作傳以此事正當度作相時不得束手局外故以此歸之其實非常時寔事則轉不免阿好矣

### 【校勘】

○家一壽考堂本是「家」に作る。湛胎堂本により改む。

### 【書き下し】

5 新唐書は周旋多し

新唐書は其の人の美を本傳に著す。而して別に其の疵を他傳に見ずは、固より隱揚の意を失せず。其の數人一善事を共にする有り、而るに數人に分隸し、各々をして其の功を専らにするを得さしめ、若し數傳參觀せずんば則ち竟に一人獨り之れを爲すの事にして他人と與にする無き者に似るは、此れ善を善とし長を欲すると雖も、究に信史に非ざるなり。吳績糾繆已に數條を摘すること、顔利の擒へらるや、李靖傳は則ち以て張寶相の擒ふる所と爲し、江夏王道宗傳は則ち以て道宗の執ふる所と爲し、一張昕の死するや、高固傳は則ち以て固間を伺ひ之を斬ると爲し、楊朝晟傳は則ち以て朝晟の父海賓の斬る所と爲し、一劉闢の叛するや、

杜黃裳傳は則ち「惟だ黃裳のみ固く赦さざるを勸む」と云ひ、嚴綬傳に又「綬天子新たに位に即けば威を失ふ可からざるを以て必ず誅するを請ふ」と云ひ、李吉甫傳に又「吉甫獨り赦すこと無きを請ふ」と謂ふが如し。續の糾擿する所已に略ば一端を見せり。然れども特だに此れのみならずらざるなり。蘇頌傳に「元宗内難を平ぐるとき、書詔填委するに、獨り頌のみ太極殿の後閣に在り、口づから占授する所の功狀百緒、輕重差ふ所無し。書史「公に丐ふ、之れを徐るにせよ。然らざれば手腕脱けん」と曰ふ」と。是れ元宗韋后を誅する時、惟だ頌一人筆を執るなり。而るに劉幽求傳に又「是の夜の號令詔敕一に幽求の手に出づ」と云ひ、李又傳に又「韋氏の變、詔令嚴促、又の草定多し」と云ふは、則ち一事なり。而るに之れを三人に係くれば、究に未だ知らず、何れの者はれを爲せるや。按ずるに、舊唐書幽求傳に、元宗韋庶人を討つ。是の夜下す所の制書皆幽求に出づ」と。而して頌傳並びに韋を誅する時筆を執るの事無く、但だ「神龍中、文誥皆其の手に出づ」と云ふのみ。然らば則ち頌の草制敏速なる、本より名を一時に擅にするも、而れども韋を誅するの夕、實に直に當たらず。子京強いて此の事を以て之れに隸するのみ。又、通鑑に

「穆宗風疾を得。裴度力めて入見を請ひ、並びに上疏し太子を立てるを請ふ。李逢吉進言し、『景王已に長ず。請ふ立て太子と爲さんと』と曰ふ。度速かに詔を下すを請ふ。兩省官も亦た繼ぎて疏する有り。是に於いて敬宗立つを得」と。是れ敬宗の立つは、度と逢吉及び兩省官と共に之を成すなり。亦た敬宗本紀に見ゆ。而るに裴度傳は則ち「穆宗風眩す。度獨り内殿に到り太子を立てるを求め、遂に景王を以て嗣と爲す」と云へば、則ち全く此の事を以て功を度に歸せり。李逢吉傳も又獨り此の事を以て逢吉に歸し、而かも略して度に及ばざれば、則ち敬宗を立てるは究に誰の力なるや。朱泚の亂、德宗鳳翔に幸せんと欲するも、而るに中ばして止む。蕭復傳は則ち「復上に謂ひて曰く『鳳翔は乃ち泚の舊の部曲。恐らくは惡を同にする者有り』と。遂に往かず。未だ幾くならずして其の將李楚琳果して亂す」と云ふ。而るに姜公輔傳に又「帝鳳翔に赴かんと欲するも、公輔『鳳の帥張鎰は乃ち文吏、軍且に變有らんとす』と謂へば、乃ち奉天に之く」と謂へば、則ち德宗の鳳翔に舍せんとするや、究に何人止むを勸むるや。敬宗の崩するや、蘇佐明の爲めに弑せらる。劉克明詔を矯め絳王悟を立て。樞密使王守澄・楊承和等、江王涵を迎立し、并

びに克明等を討ち之れを斬り、裴度を以て冢宰を攝らしめ、百官を江王に紫宸門の外廡に謁見せしむ。是れ文宗の立つは、全く守澄等の功に屬す。度は初め與り知らず。新書は文宗紀に於いて之れを敘し、略して度に及ばず。而るに度の本傳は則ち「敬宗弑せられ、度策を定め劉克明等を誅し、江王を迎立す。是れを文宗と爲す」と云ひ、又略して守澄等に及ばざれば、則ち並びに本紀と自ら相牴牾せり。蓋し歐公紀を作るに事に據り直書す。子京傳を作るに、此の事正に度相と作るの時に當れば手を局外に束ぬるを得ざるを以ての故に、此れを以て之れに歸するも、其の實當時の寔の事に非ざれば、則ち轉た阿好を免れざるなり。

【語注】

○新唐書一書名。二百二十五卷。本紀・志・表は歐陽脩、列傳は宋祁の撰とされる。○吳縝糾繆に……縝糾、字は廷珍。北宋、成都の人。『新唐書糾繆』二十卷はその撰。「頡利の擒」に關しては、卷四、四曰自相違舛、江夏王道宗李靖等傳不同に、「張昕の死」に關しては、同、誅張昕三傳各異に、「劉闢の叛」に關しては、卷一、一曰以無爲有、李吉甫謀討劉闢に載る。○頡利の擒へ……頡利は唐の突厥可汗。貞觀中討伐され、捕らえられて京師に至り、右衛大

將軍に任ぜられ、唐に死す。『舊唐書』卷三、本紀第三、太宗本紀下に「(貞觀四年)三月庚辰、大同道行軍副總管張寶相生擒頡利可汗、獻於京師。」と有り、同、卷百九十四上、列傳第四百四十四上、突厥傳上に「(貞觀四年二月)靖乘間襲擊、大破之、遂滅其國。頡利乘千里馬、獨騎奔于從姪沙鉢羅部落。三月、行軍副總管張寶相率衆奄至沙鉢羅營、生擒頡利送于京師。」と有り、『新唐書』卷二、本紀第二、太宗本紀に「(貞觀四年)三月甲午、李靖俘突厥頡利可汗以獻。」と有り、同、卷二百十五上、列傳第四百四十四上、突厥傳上に「頡利得千里馬、獨奔沙鉢羅。行軍副總管張寶相禽之。」と有る。○李靖傳は則……『新唐書』卷九十三、列傳第十八、李靖傳に「頡利亡去、爲大同道行軍總管張寶相禽、以獻。」と有る。なお、『舊唐書』卷六十七、列傳第十七、李靖傳に「頡利乘千里馬、將走投吐谷渾。西道行軍總管張寶相擒之、以獻。」と有る。○江夏王道宗……道宗は、高祖の從父兄の子である淮陽王道玄の從父弟。『新唐書』卷七十八、列傳第三、江夏王道宗傳に「(貞觀)三年、爲大同道行軍總管、助李靖破虜、親執頡利可汗、賜封六百戶、還爲刑部尙書。」と有る。なお、『舊唐書』卷六十、列傳第十、江夏王道宗傳に「(貞觀)三年、爲大同道行軍總

管。遇李靖襲破頡利可汗、頡利以十餘騎來奔其部。道宗引兵逼之、徵其執送頡利。頡利以數騎夜走、匿于荒谷。沙鉢羅懼、馳追獲之、遣使送於京師。以功賜實封六百戶、召拜刑部尚書。」と有る。○一張昕の死……張昕は、李懷光の邠寧留後。『新唐書』卷一百五十六、列傳第八十一、韓游瓌傳に「李懷光叛、誘游瓌爲變。游瓌白發其書、帝曰『卿可謂忠義矣。』對曰『臣安知忠義。但懷光誤臣、使震驚乘輿、後持臣自解。』帝嘉其誠。……會懷光誘復至、渾瑊得書、稍嚴卒以警。游瓌不知、發怒、罵罵。帝疑有變、卽日幸梁州。游瓌使子從帝。懷光檄假游瓌瑋州刺史、欲因張昕殺之。游瓌既失兵、不知所圖。有客劉南金說曰『邠有留甲、可以立功。殆天假也。』游瓌悟、誘舊部兵八百馳入邠。說昕曰『懷光自蹈禍機、公今可取富貴、無共汚不義也。我願以麾下爲公先驅。』昕不聽。游瓌移疾不出、陰結其將高固等。昕欲殺游瓌、戒左右衷甲入。昕小史李岌潛白游瓌、伏甲先起、高固等應之、斬昕首以聞。」と有り、同、卷二百二十四上、列傳第一百四十九上、叛臣傳上、李懷光傳に「興元元年、詔加太尉、賜鐵券。懷光赫然怒曰『凡疑人臣反則賜券。今授懷光、是使反也。』」抵于地。時部將韓游瓌將兵衛奉天、懷光約令爲變、游瓌以聞。數日、又密書趣之、

門者捕送。又遣將趙升鸞謀於奉天、升鸞告渾瑊曰『懷光遣達奚承俊火乾陵、使我爲內應、以脅乘輿。』瑊白發其姦、請帝決幸梁州。帝令瑊戒嚴、未畢帝自西門出、詔戴休顏守奉天。懷光遣將孟廷寶・惠靜壽・孫福率輕騎趨南山、糧料使張增遇之。三人計曰『吾屬以叛聞、不如緩軍。彼怒、不過不吾將耳。』使增給衆曰『由此東、吾有見糧可食也。』廷寶等引而東、縱卒大掠、而百官遂入駱谷。追帝不及、還白懷光。懷光怒、悉罷其兵。懷光乃奪李建徽・陽惠元等軍、屯好時、然其下稍稍攜貳。泚始憚之、至是欲遂臣懷光。懷光怒、告絕、益不安、乃引兵掠涇陽・三原・富平、遂如河中、留張昕守咸陽。而孟涉・段威勇擁兵降李晟、韓游瓌殺昕、以邠州歸。戴休顏自奉天令於軍曰『懷光反。』乃城守。」と有る。なお、吳縝『新唐書糾繆』卷四、四曰自相違舛、誅張昕三傳各異に、後掲の高固傳・楊朝晟傳と韓游瓌傳を引き「且張昕之死、不過止在一人之手。又先必有主其謀者、今此則不然。在高固傳、則以爲固伺聞斬昕。在楊朝晟傳、則以爲楊懷實以夜斬昕。在韓游瓌傳、則以爲游瓌伏甲先起、而高固應之、乃斬昕。其主謀及致殺者果在何人。爲史如此、使後人何所信乎。」と有る。○高固傳は則……『新唐書』卷一百七十、列傳第九十五、高固傳に「固生微賤、爲家所

賣、轉爲渾瑊童奴。字黃岑。性敏惠、有旅力、善騎射、能讀左氏春秋。瑊愛養之、以齊有高固、因以名。以乳媪女、女固。從瑊屯朔方。德宗在奉天、固仍從瑊、賊突入東壘門、固引瑊士長刀殺賊數十人、曳軍塞闔、賊不能入。封渤海郡王。李懷光反、使邠寧留後張昕將兵萬人、先趣河中。固在行、乃伺閒入帳下、斬昕首以徇。拜檢校右散騎常侍・前軍兵馬使。」と有る。なお、『舊唐書』卷一百五十二、列傳第一百二、高固傳に「李懷光既反、德宗再幸梁漢。懷光發跡邠・寧。至是、使留後張昕取將士萬餘人、以資援河中。固、時在軍中。乃伺便突入張昕帳中、斬首以徇。拜檢校右散騎常侍・前軍兵馬使。」と有る。○楊朝晟傳は……『新唐書』卷一百五十六、列傳第八十一、楊朝晟傳に「楊朝晟、字叔明。夏州朔方人。……建中初、從李懷光討劉文喜涇州、斬獲多、加驃騎大將軍。李納寇徐州、從唐朝臣往討、常冠軍。懷光赴難奉天、屬朝晟兵千人下咸陽、賜實封百五十戶。懷光反、韓游瓌退保邠・寧、賊黨張昕守邠州、大索軍實、多募士、欲潛歸之。朝晟父懷實爲游瓌將、夜以數十騎斬昕及同謀者。游瓌遣懷實告行在、德宗勞問、授兼御史中丞。朝晟泣見懷光曰『父立功於國。子當誅、不可以主兵。』懷光繫之。及諸軍圍河中、游瓌營長春宮、而懷實戰甚力。懷光

平、帝原朝晟、因爲游瓌都虞候、父子皆開府・賓客・御史中丞、軍中以爲榮。」と有る。なお、『舊唐書』卷一百二十二、列傳第七十二、楊朝晟傳に「建中初、從李懷光討劉文喜于涇州、斬獲生擒居多、授驃騎大將軍、稍爲右先鋒兵馬使。後李納寇徐州、從唐朝臣征討、嘗冠軍鋒、以功授開府儀同三司・檢校太子賓客。上在奉天、李懷光自山東赴難、以朝晟爲左廂兵馬使、將千餘人下咸陽、以挫朱泚、加御史中丞、實封一百五十戶。及懷光反於河中、朝晟被脅在軍。上幸梁・洋、韓游瓌退於邠・寧。懷光以嘗在邠・寧、迫制如屬城、以賊黨張昕在邠州總後務。昕懼難作、乃大索軍資、徵卒乘、約明潛發、歸于懷光。朝晟父懷實爲遊瓌將、因夜以數十騎斬昕及同謀。遊瓌卽日使懷實奉表聞奏、上召勞問、授兼御史中丞、正除遊瓌邠寧節度使。聞謀至河中、朝晟聞其事、泣告懷光曰『父立功於國。子合誅戮、不可主兵矣。』懷光遂繫之。及諸軍進圍河中、韓游瓌營于長春宮、懷實身當戰伐。及懷光平、上念其忠、俾副元帥渾瑊特原朝晟、遂爲遊瓌都虞候。時父子同軍、皆爲開府賓客・御史中丞・榮於軍中。」と有り、『舊唐書』卷一百四十四、列傳第九十四、楊朝晟傳も略同文。○一劉闢の叛……劉闢、字は太初。貞元中の進士擢第、宏詞登科。章梟に辟され從事となり、累

遷して御史中丞・支度副使に至り、韋皋の卒した後、後務を主る。『舊唐書』卷一百四十、列傳第九十、劉關傳、『新唐書』卷一百五十八、列傳第八十三、劉關傳に傳有り。その叛亂については、『新唐書』卷七、本紀第七、憲宗本紀に「永貞元年八月、順宗詔立爲皇帝。……癸丑、劍南西川節度使韋皋卒、行軍司馬劉關自稱留後。……元和元年正月丁卯、大赦、改元。……癸未、長武城使高崇文爲左神策行營節度使、率左右神策京西行營兵馬使李元奕・山南西道節度使嚴礪・劍南東川節度使李康、以討劉關。甲申、太上皇崩。劉關陷梓州、執李康。……（六月）丁酉、高崇文及劉關戰于鹿頭柵、敗之。癸卯、嚴礪又敗之于石碑谷。……（七月）癸丑、高崇文及劉關戰于玄武、敗之。……九月丙午、嚴礪及劉關戰于神泉、敗之。辛亥、高崇文克成都。……（十月）戊子、劉關伏誅。」と有り、同、本傳に「皋卒、關主後務。諷諸將徵旆節、憲宗以給事中召之、不奉詔。時帝新即位、欲靜鎮四方、卽拜檢校工部尚書・劍南西川節度使。關意帝可動、益驚蹙。吐不臣語、求統三川、欲以所善盧文若節度東川、卽以兵取梓州。且以術家言五福・太一舍于蜀、乃造大樓以祈祥。帝始重征討、而宰相杜黃裳勸帝且言『關妄書生耳。可鼓而俘也。』薦高崇文・李元奕等將神策行營

兵皆西、使嚴礪・李康犄角之。詔許自新、關不聽。崇文取東川、帝乃下詔奪其官。進破鹿頭關、遂下成都。關從數十騎走至羊灌田、自投水、不能死。騎將鄺定進禽之。……樞車送關京師。……乃伏罪。獻廟社、徇于市、斬于城西南獨柳下。子超郎等九人、與部將崔綱以次誅。」と有る。なお、吳縝『新唐書糾繆』卷一、一曰以無爲有、李吉甫謀討劉關に、後掲の李吉甫傳を引き「今案、杜黃裳傳云『劉關叛。唯黃裳固勸不赦。』又嚴綬傳云『劉關叛。綬建言天子、始卽位、不可失威、請必誅。』由是言之、劉關之叛、杜黃裳・嚴綬亦皆請必誅。非獨吉甫請無置。此其證一也。又嚴綬傳云『綬爲河東節度使。劉關反。綬請選銳兵、遣大將李光顏助討賊平之。』又高崇文傳云『崇文討劉關、西自閬中出、卻劍門兵、解梓潼之圍。鹿頭山南距成都一百五十里、扼二川之要、關城之。旁連八屯、以拒東兵。崇文破賊于城下。明日、戰萬勝堆。堆直鹿頭左、使驍將募死士奪而有之。下敵鹿頭城。凡八戰皆捷、賊心始搖。大將阿跌光顏〔卽李光顏也。〕後期、懼罪、請深入自贖。乃軍鹿頭西、斷賊糧道。賊大震、其將仇良輔舉鹿頭城降。遂趣成都、關走追禽之。』又案嚴礪傳『劉關反時、礪爲山南節度使。』今吉甫傳乃云『崇文圍鹿頭未下、嚴礪請出并州兵。』且鹿頭距成都止二百

五十里。并州之兵與李光顏、是時已皆在其行久矣。今乃始云「圍鹿頭未下、嚴礪請出并州兵。」無乃太後時歟。此其證一也。且嚴綬傳、自劉闢初反、綬即建請自河東選兵遣將助討賊。今此乃以爲山南節度使嚴礪。卽其誤可知。此其證三也。且鹿頭之距成都纔一百五十里、而果閬渝合皆在成都五七百里之外。今崇文旣已圍鹿頭、則其城乃必爭之地而賊方危破之秋。是不可緩頃刻而退尺寸之際也。今乃云「崇文圍鹿頭未下、礪請出并州兵、與崇文趨果閬以攻渝合」如此則是鹿頭將拔、賊勢已敗、而礪乃始建請出并州兵、吉甫方欲起宣洪斬鄂強弩、不唯其時日已太遲緩、乖牾而其所指又皆捨近而之遠、殊非兵家攻取之要。此昭然可見其謬。其證四也。吉甫旣以起并州兵入蜀爲非是、而請起宣洪斬鄂強弩兵、擣三峽之虛、使崇文懼舟師而有功而悉力。然案諸人傳、則并州之兵自初伐叛、卽與崇文偕至卒以成功。而宣洪斬鄂之兵不聞有自三峽進者、而闢亦就禽。然則吉甫所謀竟無毫髮之效。其證五也。案杜黃裳傳云「劉闢叛、唯黃裳固勸不赦。專委高崇文、凡兵進退、黃裳自中指授、無不切于機。崇文素憚劉澣。黃裳使人謂曰、公不奮命者、當以灑代。崇文懼、一死力縛賊、以獻。蜀平、羣臣賀。憲宗目黃裳曰、時卿之功。」由此言之、平劉闢者實黃裳之力、今反歸功於

吉甫。此其證六也。夫黃裳以宰相而當伐叛之任。書之其傳固其宜矣。而吉甫以一中書舍人。乃欲多有其功就使其實且猶未可。而況於虛乎。然則此吉甫數事本皆無有、而今史之所述如是者、非它。蓋其子德裕秉政日、嘗重修憲宗實錄。故吉甫之美惡皆增損而不實。若此之事、乃重修之時史官求書吉甫之美、而不可得於是。竊取黃裳之事依倣而爲之爾。故其事大抵相類然、不顧其間參錯牴牾、考其實則無有今。新書又因以爲實而書之、無所刊、正豈朝廷重修之意哉。」と有る。○杜黃裳傳は……『新唐書』卷一百六十九、列傳第九十四、杜黃裳傳に「俄而劉闢叛、議者以闢特險、討之或生事。唯黃裳固勸不赦、因奏罷中人監軍、而專委高崇文。凡兵進退、黃裳自中指授、無不切于機。崇文素憚劉澣。黃裳使人謂曰『公不奮命者、當以灑代。』崇文懼、一死力縛賊以獻。蜀平、羣臣賀。憲宗目黃裳曰『時卿之功。』」と有る。なお、『舊唐書』卷一百四十七、列傳第九十七、杜黃裳傳に「劉闢作亂。議者以劍南險固、不宜生事。唯黃裳堅請討除、憲宗從之。又奏請不以中官爲監軍、祇委高崇文爲使。黃裳自經營伐蜀、以至成功。指授崇文、無不懸合。崇文素憚劉澣。黃裳使人謂崇文曰『若不奮命、當以劉澣代之。』由是得崇文之死力。旣平闢、幸臣入賀。帝目黃裳曰『此卿



之功也。』と有る。○嚴綬傳に又：『新唐書』卷一百一十九、列傳第五十四、嚴綬傳に「憲宗立、楊惠琳反夏州、劉闢反蜀。綬建言『天子始即位、不可失威。請必誅。』選銳兵、遣大將李光顏助討賊。二賊平、檢校尚書左僕射、封扶風郡公、進司空。」と有る。なお、『舊唐書』卷一百四十六、列傳第九十六、嚴綬傳に「遷綬銀青光祿大夫・檢校工部尚書、兼太原尹・御史大夫・北都留守、充河東節度支度營田觀察處置等使。元和元年、楊惠琳叛於夏州、劉闢叛於成都。綬表請出師討伐。綬悉選精甲、付牙將李光顏兄弟。光顏累立戰功、蜀・夏平。加綬檢校尚書左僕射、尋拜司空、進階金紫、封扶風郡公。」と有る。○李吉甫傳に：『新唐書』卷一百四十六、列傳第七十一、李吉甫傳に、「憲宗立、以考功郎中召、知制誥。俄入翰林爲學士、遷中書舍人。劉闢拒命、帝意討之、未決。吉甫獨請無置、宜絕朝貢以折姦謀。時李錡在浙西、厚賂貴幸、請用韓滉故事領鹽鐵、又求宣・歙。問吉甫。對曰『昔韋臯蓄財多、故劉闢因以構亂。李錡不臣有萌、若益以鹽鐵之饒、采石之險、是趣其反也。』帝寤、乃以李巽爲鹽鐵使。高崇文圍鹿頭未下、嚴礪請出并州兵、與崇文趨果・閩、以攻渝・合。吉甫以爲非是。因言『漢伐公孫述、晉伐李勢、宋伐譙縱、梁伐劉季連・蕭紀。

凡五攻蜀、繇江道者四。且宣・洪・蕲・鄂疆弩、號天下精兵、爭險地兵家所長。請起其兵擣三峽之虛。則賊勢必分、首尾不救、崇文懼舟師成功、人有鬪志矣。』帝從之。礪復請大臣爲節度。吉甫諫曰、『崇文功且成。而又命帥、不復盡力矣。』因請以西川授崇文、而屬礪東川。益資・簡六州、使兩川得以相制。由是崇文悉力。劉闢平、吉甫謀居多。」と有る。なお、『舊唐書』卷一百四十八、列傳第九十八、李吉甫傳に「憲宗嗣位、徵拜考功郎中、知制誥。既至闕下、旋召入翰林爲學士、轉中書舍人、賜紫。憲宗初即位、中書小吏滑渙與知樞密中使劉光琦暱善、頗竊朝權、吉甫請去之。劉闢反、帝命誅討之、計未決。吉甫密贊其謀、兼請廣徵江淮之師、由三峽路入、以分蜀寇之力。事皆允從、由是甚見親信。」と有る。○蘇頌傳に：『新唐書』卷一百二十五、列傳第五十、蘇頌傳に「遷給事中・脩文館學士、拜中書舍人。時瓌同中書門下三品、父子同在禁筦、朝廷榮之。玄宗平內難、書詔填委、獨頌在太極後閣、口所占授功狀百緒、輕重無所差。書史白曰、丐公徐之、不然手腕脫矣。中書令李嶠曰、舍人思若涌泉、吾所不及。遷太常少卿、仍知制誥。」と有る。○韋后一韋后は、中宗の皇后。京兆萬年の人。中宗即位の嗣聖元年、皇后に立てられるが、中宗が廢位され

るとともに房州に従い、後ともに復位す。景龍四年六月、中宗が崩御すると、末子温王重茂を皇太子に立て擁立し、臨朝攝政す。後、臨淄郡王（玄宗）叛し、亂兵に殺され、庶人と追貶される。『舊唐書』卷五十一、列傳第一、后妃傳上、中宗韋庶人傳・『新唐書』卷七十六、列傳第一、后妃傳上、中宗韋皇后傳に傳有り。○劉幽求傳に：「『新唐書』卷一百二十一、列傳第四十六、劉幽求傳に「聖曆中、舉制科中第。調閩中尉、刺史不禮、棄官去。久之、授朝邑尉。……臨淄王入誅韋庶人、預參大策、是夜號令詔敕一出其手。以功授中書舍人、參知機務、爵中山縣男、實封二百戶、授二子五品官、二代俱贈刺史。睿宗立、進尚書右丞・徐國公、增封戶至五百、賜物千段、奴婢二十人・第一區・良田千畝・金銀雜物稱是。」と有る。○李又傳に又……『新唐書』卷一百二十九、列傳第四十四、李又傳に、「景龍初、葉靜能怙勢、又條其姦、中宗不納。遷中書舍人・脩文館學士。……韋氏之變、詔令嚴促、多又草定。進吏部侍郎、仍知制誥。與宋璟等同典選事、請謁不行。時人語曰、李下無蹊徑。改黃門侍郎、封中山郡公。制敕不便、輒駁正。貴幸有求官者。睿宗曰、朕非有斬、顧李又不可過耳。」と有る。また、『舊唐書』卷一百一、列傳第五十一、李又傳に

傳有るも韋氏に關する記述は見られない。○舊唐書一書名、二百卷。後晉の劉昫等撰。○幽求傳に：「『舊唐書』卷九十七、列傳第四十七、劉幽求傳に「及韋庶人將行篡逆、幽求與玄宗潛謀誅之、乃與苑總監鍾紹京・長上果毅麻嗣宗及太平公主之子薛崇暉等夜從入禁中討平之。是夜所下制敕百餘道、皆出於幽求。以功擢拜中書舍人、令參知機務。……。」と有る。○頌傳並びに：「『舊唐書』卷八十八、列傳第三十八、蘇頌傳に「神龍中、累遷給事中、加修文館學士、俄拜中書舍人。尋而頌父同中書門下三品、父子同掌樞密、時以爲榮。機事填委、文誥皆出頌手。中書令李嶠歎曰、舍人思如湧泉、嶠所不及也。俄遷太常少卿。」と有る。○實に直に當……『舊唐書』蘇頌傳の「神龍中」とは中宗復位の直後、つまり韋后伏誅以前のことである。よって「實に未だ……」と讀むことは避けた。○子京―宋祁の字。○通鑑に穆宗……通鑑は書名。『資治通鑑』二百九十四卷。宋の司馬光の撰。卷二百四十二、唐紀五十八に「(長慶二年冬十月)庚辰、上與宦者擊毬於禁中、有宦者墜馬。上驚因得風疾、不能履地。自是人聞上起居。宰相屢乞入見不報。裴度三上疏請立太子、且請人見。十二月辛卯、上見羣臣於紫宸殿御大繩牀。悉去左右衛官、獨宦者十餘人侍側、人情

稍安。李逢吉進言景王已長請立爲太子。裴度請速下詔、副天下望。既而兩省官亦繼有請立太子者。癸巳、詔立景王溥爲皇太子。」と有る。なお、『舊唐書』卷十六、本紀第十六、穆宗本紀に「(長慶二年十一月)庚辰、上與內官擊鞠禁中、有內官欻然墜馬、如物所擊。上恐、罷鞠升殿、遽足不能履地、風眩就牀。自是外不聞上起居者三日。……(十二月)庚寅、宰臣李逢吉率百僚至延英門請見、上不許。中外與度等三上疏請立皇太子。……辛卯、上於紫宸殿御大繩牀見百官。李逢吉奏景王成長、請立爲皇太子。左僕射裴度又極言之。癸巳、詔景王爲皇太子。」と有る。○敬宗本紀に……『新唐書』卷八、本紀第八、敬宗本紀に「長慶二年十二月、穆宗因擊毬暴得疾、不見羣臣者三日。左僕射裴度三上疏、請立皇太子。而翰林學士・兩省官相次皆以爲言。居數日、穆宗疾少間、宰相李逢吉請立景王爲皇太子。」と有る。○裴度傳は則……『新唐書』卷一百七十三、列傳第九十八、裴度傳に「是時、徐州王智興逐崔羣、諸軍盤互河北、進退未一。議者交口請相度、乃以本官兼中書侍郎・平章事。權佞側目、謂李逢吉險賊善謀可以構度、共諷帝自襄陽召逢吉還、拜兵部尚書。度居位再闋月、果爲逢吉所間、罷爲左僕射。帝暴風眩、中外不聞問者凡三日。度數請到內殿、求立

太子、翼日乃見。帝遂立景王爲嗣。逢吉既代相、思有以牙孽之、引所厚李仲言・張又新。李續・張權輿等、內結宦官種支黨、醜沮日聞。乃出度山南西道節度使、奪平章事。」と有る。○李逢吉傳も……『新唐書』卷一百七十四、列傳第九十九、李逢吉傳に「帝暴疾、中外阻遏。逢吉因中人梁守謙・劉弘規・王守澄議、請立景王爲皇太子。帝不能言、頷之而已。明日、下詔、皇太子遂定。」と有る。○朱泚の亂……朱泚は、幽州昌平の人。德宗即位し、太子太師・鳳翔尹を加えられ、建中元年、涇州の劉文喜が亂を爲すと、四鎮北庭行軍・涇原節度使を加えられ、諸軍とこれを討つ。後、中書令を加えられ、鳳翔に鎮し、涇原節度を領す。同二年、太尉を加えられる。實弟朱滔が叛せんとし、密事が露見するも赦され、身を京師に留められる。同四年十月、涇原兵が叛し、德宗が難を奉天に避けると、賊帥となり、大秦皇帝を僭稱し、應天元年を號す。奉天に逼るも敵わず。翌年、改めて國を漢と號し、天皇元年を稱すも、三月、官軍に京師を恢復され、西走するも納れる所無く、配下に殺される。『舊唐書』卷二百下、列傳第一百五十下、朱泚傳・『新唐書』卷二百二十五中、列傳第一百五十中、逆臣傳中、朱泚傳に傳有り。なお、『資治通鑑』卷二百二十八に「始

上以奉天迫隘、欲幸鳳翔。戶部尚書蕭復聞之、遽請見曰、陛下大誤。鳳翔將卒皆朱泚故部曲、其中必有與之同惡者。

臣尙憂張鎰不能久、豈得以鑾輿蹈不測之淵乎。上曰、吾行計已決、試爲卿留一日。明日、聞鳳翔亂、乃止。」と有る。

○蕭復傳は則：—『新唐書』卷一百一、列傳第二十六、蕭復傳に「扈狩奉天。帝惡庫險、欲西如鳳翔依張鎰。復曰『鳳翔乃泚舊兵。今泚悖亂、當有同惡者。雖鎰、臣畏不免。』

帝曰『朕業行、留一日以驗爾言。』俄而鎰爲李楚琳所害。於是拜吏部尚書・同中書門下平章事。」と有る。○姜公輔

傳に：—『新唐書』卷一百五十二、列傳第七十七、姜公輔傳に「朱滔助田悅也、以蜜裏書間道邀泚、太原馬燧獲之、

泚不知也、召還京師。公輔諫曰『陛下若不能坦懷待泚、不如誅之。養虎無自貽害。』不從。俄而涇師亂、帝自苑門出。

公輔叩馬諫曰『泚嘗帥涇原得士心。向以滔叛奪之兵、居常

佛鬱不自聊。請馳騎捕取以從、無爲羣兇得之。』帝倉卒不及聽。既行、欲駐鳳翔倚張鎰。公輔曰『鎰雖信臣、然文吏

也。所領皆朱泚部曲、漁陽突騎、泚若立、涇軍且有變。非萬全策也。』帝亦記桑道茂言、遂之奉天。不數日、鳳翔果

亂、殺鎰。」と有る。なお、『舊唐書』卷一百三十八、列傳第八十八、姜公輔傳に「建中四年十月、涇師犯闕。德宗蒼

黃自苑北便門出幸、公輔馬前諫曰『朱泚嘗爲涇原帥得士心。昨以朱滔叛、坐奪兵權、泚常憂憤不得志。不如使人捕之、

使陪鑾駕。忽羣兇立之、必貽國患。臣頃曾陳奏、陛下苟不能坦懷待之則殺之。養獸自貽其患、悔且無益。』德宗曰

『已無及矣。』從幸至奉天、拜諫議大夫、俄以本官同中書門下平章事。」と有る。○敬宗の崩ず：—敬宗は李湛。唐の

十六代皇帝。『舊唐書』卷十七上、本紀第十七上、敬宗本紀・『新唐書』卷八、本紀第八、敬宗本紀に傳有り。『資

治通鑑』卷二百四十三に「十二月辛丑、上夜獵還宮、與宦官劉克明・田務澄・許文瑞及擊毬軍將蘇佐明・王嘉憲・石

從寬・閻惟直等二十八人飲酒。上酒酣、入室更衣。殿上燭忽滅、蘇佐明等弒上於室內。劉克明等矯稱上旨、命翰林學

士路隋草遺制、以絳王悟權勾當軍國事。壬寅、宣遺制、絳王見宰相百官於紫宸外廡。克明等欲易置內侍之執權者、於

是樞密使王守澄・楊承和・中尉魏從簡・梁守謙定議、以衛兵迎江王涵入宮、發左右神策・飛龍兵進討賊黨、盡斬之。

克明赴井、出而斬之。絳王爲亂兵所害。時事起蒼猝、守澄等以翰林學士韋處厚博通古今一夕處置、皆與之共議。守澄

等欲號令中外、而疑所以爲辭。處厚曰、正名討罪、於義何嫌。安可依違、有所諱避。又問、江王當如何踐阼。處厚曰、

詰朝、當以王教布告中外以已平內難。然後羣臣三表勸進、以太皇太后令冊命卽皇帝位。當時皆從其言、時不暇復問有司、凡百儀法皆出於處厚、無不叶宜。癸卯、以裴度攝冢宰、百官謁見江王於紫宸外廡。王素服涕泣。甲辰、見諸軍使於少陽院。」と有る。○文宗紀に於……『新唐書』卷八、本紀第八、文宗本紀に「寶曆二年十二月、敬宗崩。劉克明等矯詔以絳王悟句當軍國事。壬寅、內樞密使王守澄・楊承和・神策護軍中尉魏從簡・梁守謙、奉江王而立之、率神策六軍・飛龍兵誅克明、殺絳王。乙巳、江王卽皇帝位于宣政殿。」と有る。なお、『舊唐書』卷十七上、本紀第十七上、文宗本紀に「寶曆二年十一月八日、敬宗遇害。賊蘇佐明等矯制立絳王勾當軍國事。樞密使王守澄・中尉梁守謙率禁軍討賊、誅絳王、迎上于江邸。癸卯、見宰臣于閣內、下教處分軍國事。甲辰、……宰臣百僚三下表勸進。乙巳、卽位於宣政殿。」と有る。○度の本傳は……『新唐書』卷一百七十三、列傳第九十八、裴度傳に「帝崩。定策誅劉克明等、迎立江王。是爲文宗。」と有る。なお、『舊唐書』卷一百七十、列傳第一百二十、裴度傳に「屬盜起禁闈、宮軍晏駕。度與中貴人密謀、誅劉克明等、迎江王立爲天子。」と有る。

【現代語譯】

『新唐書』はある人に美事があれば、それをその人の本傳に書き著している。そしてその人の汚點を他人の傳の中に記しているのは、言うまでもなく、人の惡事を隠して善事を揚げんとする意圖を失わないのである。數人で一つの善事を共にした事例が有り、それなのに、その記述を數人の傳に分けて書き連ね、各人にその功績を獨占できるようにしておいて、もし數人の傳をそれぞれ參考にして見るこゝがなければ、とうとう一人だけでした事であつて他人と一緒にしたわけではないように見えてしまふのであれば、これは善を善とすることを伸ばそうとしているとはいへ、結局、信すべき史書ではなくなつてしまふ。吳縝の『新唐書糾繆』がすでに（こゝした例）數條を曝きだしたことは、頡利が擒えられた事については、李靖傳では張寶相が擒えたとし、江夏王道宗傳では道宗が執えたとし、一人の張昕が死んだ事については、高固傳では高固が隙を突いて斬つたとし、楊朝晟傳では楊朝晟の父海賓が斬つたとし、一人の劉闢が叛した事については、杜黃裳傳では「ただ黃裳のみが赦さぬように強く勧めた」と言い、嚴綬傳では又「嚴綬は、天子が新たに卽位したのであれば、その權威を失墜させてはならないからと、必ず誅するように請願した」と言

い、李吉甫傳では又「李吉甫だけが赦すことがないようにと請願した」と言っているなどである。吳縝が正し曝いた箇所はすでに問題の一端を示している。しかし、これだけではない。蘇頌傳に「玄宗が内難を平定する時、詔書は積み重なっていたが、ただ蘇頌のみが太極殿の後閣におり、その口から述べられる諸臣の功績は様々であったが、その輕重を誤ることはなかった。筆寫の官は『お願いします。ゆっくり話して下さい。そうでなければこの腕が脱けてしまいます』と言った」とある。これは、玄宗が韋后を誅した際、ただ蘇頌一人がその詔敕の筆を執ったのである。しかし、劉幽求傳に又「この夜の號令詔敕は、劉幽求のみの手に出たものである」と言っており、李义傳に又「韋氏の變の際、詔令は急を要したので、李义の草定したものが多かった」と言っているのは、同一の事件のことである。それなのに、これを二人に關係づけてしまえば、まったくいたい、誰が書いたというのか。『舊唐書』を見てみると、幽求傳に「玄宗が韋后を討った。この夜下された制書は、すべて劉幽求による」とある。そして蘇頌傳には韋氏を誅した時に筆を執った記事は全くなく、ただ「神龍年間、誥令はみな蘇頌によって書かれた」と言うだけである。そう

であるならば、蘇頌が詔制の草案を作ることの敏速さは、もともとその名聲を一時に擲にしたとはいへ、しかし、韋氏を誅したその夜は、實はその任になかったのである。宋祁が強引にこの事を蘇頌の傳に書き連ねているだけである。又、『資治通鑑』に「穆宗が中風に罹った。裴度は力を盡して入見を願いで、同時に上疏して太子を立てることを請願した。李逢吉は進言し、『景王はもう立派に成長しました。彼を立てて太子とすることを請願致します』と言った。裴度は速かに詔を下すことを請願した。門下・中書の二省の官もまた續けて上疏してきた。このようにして敬宗は太子に立つことができたのである」とある。これは、敬宗が太子に立てられたのは、裴度と李逢吉と門下・中書の二省の官とが共にこれを行ったのである。また、敬宗本紀にも見える。しかし、裴度傳はそれを「穆宗が癩癩を患った。裴度は一人内殿に行くと、太子を立てることを求め、そこで景王を後嗣とした」と言っているのので、敬宗擁立についての功績を全て裴度に與えているのである。李逢吉傳も又、この功績を一人李逢吉に與え、しかも裴度については省略して書き及んでいないのであるから、ならば敬宗擁立は、いったい誰のはたらきによるのか。朱泚の亂の際、徳宗は

鳳翔に行幸しようと思ったが、しかし途中で止めた。蕭復傳に「蕭復は徳宗に『鳳翔こそ朱泚の元の手下たちです。

恐らく、悪事を共に謀る者がいましょう』と言った。そこで（徳宗は鳳翔に）行かなかった。それから間もなく、朱泚の將であった李楚琳がやはり亂を起こした」と言っている。しかし、姜公輔傳に又「徳宗は鳳翔に行こうとしたが、姜公輔が『鳳翔節度使の張鎰は文官なので、鳳翔の軍には變事が起こるでしょう』といったので、奉天に行った」と

言っているのです。では徳宗が鳳翔に行こうとした時、いったい誰がそれを止めるように勧めたのか。敬宗が崩じたのは、蘇佐明に弑されたのである。劉克明は詔を詐り絳王悟を擁立した。樞密使の王守澄・楊承和等は、江王涵を迎えし、同時に劉克明等を討ち、これを斬り、裴度を宰相として百官を江王に紫宸門の外の廡で謁見させた。これは、文宗が擁立されたのは、全て王守澄等の功績である。裴度は初め關與していない。『新唐書』は文宗紀でこのことを述べて、裴度については略して觸れていない。それなのに、裴度の本傳には「敬宗が弑殺されると、裴度は方策を定め劉克明等を誅殺し、江王を迎立した。これが文宗である」と言っており、また王守澄等について略して觸れていない

のだから、文宗本紀と互いに食い違っていてしまっている。思うに、歐陽脩は『新唐書』の本紀を作る際に、事實に基づいて、そのまま書いているのだろう。宋祁は、列傳を作るのに際し、この事件は丁度裴度が宰相であった時のことなので、裴度が國の大事に與り知らぬわけではない、ということから、この事件の功績を與えたのだが、その實當時あった本當の事ではないのだから、はてさて、阿好の誹りを免れまい。

（大兼健寛・田中良明）